

（西暦 2024 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

大腿骨近位部骨折者における生活行為工程分析表に基づく作業療法実践
—群内前後比較研究—

学位の種類： 修士（作業療法学）

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 22896705

氏 名：高橋 啓

（指導教員名：石橋 裕）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

本研究は、亜急性期における大腿骨近位部骨折者を対象に生活行為工程分析表（以下、PADA-D）の信頼性と妥当性を検証し、群内前後比較研究にて PADA-D に基づいた生活行為の分習法的支援の効果について検討することを目的とした。

研究デザインは、群内前後比較研究での介入研究とした。介入研究の実施にあたり、事前に大腿骨近位部骨折者に対する PADA-D の信頼性と妥当性を検証した。

研究対象者は、2023 年 4 月から 12 月までの間に、A 病院に入院した 65 歳以上の大腿骨近位部骨折の診断を受けた者とした。除外基準は、意思決定が困難な者、大腿骨近位部骨折以外に顕著な身体障害を有する者、せん妄を併発している者、脳血管疾患を有する者を除外対象とした。信頼性の検証は、再検査信頼性を実施し級内相関係数（以下、ICC）を算出した。妥当性の検証は、基準関連妥当性を実施し各指標との関連性について Spearman の順位相関係数を算出した。介入研究は、作業療法を週 6 回、1 回 40 分～60 分、全体で 30 回程度を約 1 ヶ月実施し、その前後で評価を実施した。機能的自立度評価法（以下、FIM）と並行して PADA-D 評価を用いて生活行為の観察評価を実施し、その後にクライアント（以下、CL）と PADA-D の結果を見ながら現状を共有した。目標立案は、PADA-D の評価結果をもとに CL と目標とする生活行為を 3 つ程度協議し設定した。その際に目標とした生活行為の満足度と遂行度を 1 から 10 段階で測定した。介入内容は、CL が目標として挙げた生活行為の減点を認めた工程および下位項目に焦点を当て分習法的に生活行為の練習を実施した。解析方法は、各成果指標に対して対応のある t 検定あるいは Wilcoxon の符号付き順位検定を実施した。なお、対象者は重複しないよう配慮した。本研究は、東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認（承認番号：22093, 22094）を受け実施した。

結果は、信頼性と妥当性の検証は 52 名を解析対象とした。再検査信頼性は、PADA-D 総合得点 (ICC=0.98), BADL (ICC=0.97), IADL (ICC=0.99) であった。基準関連妥当性は、外的基準の FIM や FIM-m, FIM-c との間で中程度の正の相関を認めた。TMIG-IC との間には弱い正の相関を認めた。介入研究では、17 名を解析対象とした。平均 29 回の作業療法の結果、FIM や 30-second chair stand test, PADA-D の満足度と遂行度、自己効力感、全体的健康感、心の健康の項目で得点が有意に改善した。

本研究結果は、他の下肢整形疾患の作業療法の効果と類似していた。これらのことから、本研究は他の下肢整形疾患の作業療法と同等程度の効果を得ることができたと考える。客観的指標だけでなく、主観的指標が改善した要因としては、PADA-D の特徴を活かし、CL との目標立案および支援計画の手段として用いたことで、CL との協業が促進された可能性が考えられた。さらに、構造化された分習法的支援による成功体験の積み重ねやすさも主観的指標の改善に寄与した一因と考える。